

山形大学附属博物館報 37

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2011. 3

目 次

左が1号、右が2号	丸山俊明 (1)
長谷川竹葉の山形錦絵と乗合馬車	中川重 (3)
資料紹介 - 細谷芝圃《観音像》 -	(5)
平成22年度事業報告	(6)

左が1号、右が2号

丸山俊明 (附属博物館館長)

昨年3月に上山市の本学総合研究所に高感度加速器質量分析装置 (AMS) が導入され、6月から本格稼働を開始した。本学のAMSは「炭素14」の測定に特化しており、調査対象物に含まれる放射性炭素14の含有割合から年代を測定することができる。その分析試料の第1号と第2号に本館所蔵の木製史料が選ばれ、めでたく測定結果が出たと同時に学術的にも貴重な成果が報告された。

選ばれた標本は長谷堂城大手門扉と伝えられる栗材製の城門扉である (図1)。門扉は左右2枚



図1 長谷堂城大手門扉 (円内)と復元された外観
(写真提供は最上義光歴史館)

が保存されており、門を閉めた状態で高さ1878mm全幅2048mmと、中世の城門のなかでは小規模な部類に入る。技法においては、木割が太く回転支柱も軸吊り形式をとり、門錠も木製であるなどの点から、中世末期から近世初頭に製作された

門扉だとみられている。

長谷堂城は山形城の南西7kmほどの小高い丘陵 (標高220m程) に築かれた山形城の支城で、慶長出羽合戦のクライマックスを飾る舞台となった。この戦いは奥羽 (出羽) の関ヶ原とも呼ばれ、1600 (慶長5) 年9月に直江兼続率いる上杉軍が最上義光を攻め、両軍の激闘は半月にもおよんだ。霞城公園に建つ義光の騎馬武者像が駆け立たんとする方角こそ決戦の地、長谷堂である。扉には上杉勢が放った鉄砲の弾痕とされる傷もみられるなど、長谷堂合戦を語る貴重な史料だといわれてきたが、伝承の域にとどまっていた。

今回は左右の扉の回転支柱からそれぞれ試料が採取された。正面から見て左側の扉の回転支柱の試料番号がYU-1 (山形大学の1番目の意)、右側の回転支柱の試料番号がYU-2となった。年代測定の結果、暦年代として左側の柱が1445 (文安2) 年から1632 (寛永9) 年、右側は1463 (寛正4) 年から1636 (寛永13) 年となり、いずれも15世紀半ばから17世紀初頭にかけて伐採された木であると結論づけられた (表1)。これまでの言い伝えと矛盾しない年代測定値が示されたことで、門扉の歴史資料としての重要性が科学的に証明され、標本としての学術的価値が再認識されたばかりでなく、AMSの迅速性や信頼性も確認できた。

放射性炭素年代測定 (radiocarbon dating) とは、生物遺骸に含まれている放射性同位体である炭素14の崩壊率から年代を推定する手法で、 ^{14}C 年代測定法、炭素年代測定法、炭素14法、 ^{14}C 法などと称される。炭素14は放射性をもち、 β 線を出しながら窒素14原子に変わっていく。この放射性崩壊という炭素14の壊れ方は常に一定の速度で

進行していくため、非常に正確な時計の役割を果たすことになる。放射性元素の原子数が最初にあった量の半分に減るまでに要する時間が半減期であり、炭素14の場合は 5730 ± 40 年とわかっているため、炭素14の量を正確に計ることができれば炭素14の崩壊が起こっていた継続時間、すなわち年代を知ることができる。

生物は外界と炭素の交換をして生きているから、命ある限り生物体内の炭素14濃度は周囲の環境と同じになっているはずだ。光合成を行う植物は二酸化炭素を取り込んでいるが、死ぬと外界との炭素交換が止まり、その瞬間から閉じた系となった体内において炭素14が減りはじめる。つまり、植物の遺体を測定すれば、炭素14を含んだ組織や細胞がタイムカプセルとなっていた年数が算定できる。この測定原理を1947年に発見したシカゴ大学のWillard Frank Libbyは、その功績によって1960年にノーベル化学賞の荣誉に輝いた。

加速器で炭素14を直接数えるAMS法(Accelerator Mass Spectrometry)が1970年代末に登場すると、測定の高精度化と高効率化が一気に加速した。炭素14から放出される β 線を計る方法に比べて、必要な試料量(1mg程度)や測定時間(30分~1時間程度)が共に大幅に改善された。また、近年では加速装置の小型化が著しい。AMSの中では炭素原子をイオン化してから電圧をかけて加速する。加速されたイオンを磁場の中に通すとイオンの進行方向が曲げられる。質量の大きいイオンは曲がりにくく、反対に小さいイオンは大きく曲がる。炭素14は、炭素のなかで中性子の数が一番多くて重いため、もっとも緩やかなカーブを描く。こうして、炭素全体のうち炭素14の割合がどれくらいかを求める。AMS法では4~5万年が測定の射程限界となる。半減期などから判断される炭素14法の理論的限界年代が約6万年だから、AMS法が有力な手段であることは間違いない。

長谷堂城は戦国期に築城され、1622(元和8)

年に廃城されたといわれている。この「大手門扉」は城の門番をしていた人が引き取り、家の天井につるして代々保存してきたらしい。そのため、囲炉裏の煙と煤で300年余り薫製状態におかれており、虫食いなどからは守られた反面、新たな江戸時代の炭素14の付着によって年代が若返ってしまうという危惧もあった。そこで、表面の汚染物を避け、試料は支柱のできるだけ中心部からドリルで注意深く削り出した。正確な年代を決めるためには、目的とする生命体起源の炭素だけを取り出す必要があるから、空気中を漂う現代の塵埃ももちろん御法度である。

今回の測定結果は本館にとって記念すべき重要なデータとなることから、その詳細を表1にまとめた。今回の測定結果の中でもっとも基本となるデータは「暦年較正用年代」と記載されている 378 ± 30 と 347 ± 28 である。年代測定の結果であるから、単位は「今から何年前」を意味するyrBP(years Before PresentもしくはPhysics)と書くわけだが、いくつか条件が付いてくる。放射性炭素年代は西暦1950年を基点にし、計算にはLibbyの半減期 5568 ± 30 年を使う約束になっている。付記された年代誤差($\pm 1 \sigma$)は、年代値がその幅の中に68.2%の確率で入ることを示す。ここで早合点して $1950 - 378 = 1572$ 年や $1950 - 347 = 1603$ 年を正解としたいところだが、そうは問屋が卸さない。

炭素14は、大気の上層で宇宙線起源の中性子が大気中の窒素14に衝突することで誕生し、すぐに酸素と結合して二酸化炭素となって大気中に拡散する。これまでは、過去の大気中の炭素14量はずっと一定であったという仮定のもとに年代測定が進められてきた。しかし、地磁気の変動することによって地球に降り注ぐ宇宙線の強度が変化したり、海洋に蓄積されていた炭素が大気中に放出されたりする事件などを反映して、大気中の炭素14量がその時々で変わってしまうことに気づいた。そのため、年代測定結果をそのまま解答

表1 長谷堂城門扉の放射性炭素年代測定値および暦年較正の年代範囲

扉の回転支柱 正面から見て	測定番号	同位体分別効果の 補正に用いた 炭素同位体比	炭素14年代 1950年を基点として何年前かを示す		較正年代すなわち暦年代(calendar year) 較正曲線IntCal09を用いて較正した年代範囲(calAD)	
		$\delta^{13}\text{C}$ ‰(パーミル)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	慣用に従って年代値と 誤差を丸めた年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	1 σ 暦年代範囲 (信頼限界68.2%)	2 σ 暦年代範囲 (信頼限界95.4%)
左側の支柱	YU-1	-26.65 \pm 0.91	378 \pm 30	380 \pm 30	1451~1515calAD(53.0%) 1599~1618calAD(15.2%)	1445~1525calAD(60.3%) 1557~1632calAD(35.1%)
右側の支柱	YU-2	-26.82 \pm 0.96	347 \pm 28	350 \pm 30	1485~1524calAD(25.9%) 1559~1564calAD(3.1%) 1570~1631calAD(39.2%)	1463~1636calAD(95.4%)

とするわけにはいなくなり、年代の誤差を取り除いて実際の年代に読み替える作業が手間増えることになった。この作業のことを較正という。

そこで、年代が正確にわかっている年輪に含まれる炭素14濃度を測定し、より正確な半減期の値を使って炭素14年代を暦年に変換する研究がはじまった。その際、両者の仲立ちをするグラフが較正曲線であり、太い二重折れ線グラフの様相を呈する。最新の較正曲線では、アメリカとヨーロッパの年輪試料をつなぎ合わせて12000年前位までは樹木年代で、それ以前の24000年前まではサンゴのウラン-トリウム年代を用いて読み替えができるようになった。最近では湖底の堆積物を利用する方法も検討されており、わが国では福井県の三方五湖のひとつである水月湖の年縞データが注目を集めている。

表1に記したように「yrBP」と書かれた炭素14年代値に対して、暦年較正を施した年代値には較正済み (calibrated) を意味する「cal」をつけて「calBP」と書く決まりになっている。西暦で書ける場合には「calBC」や「calAD」と表す。較正年代は暦年代 (calendar year) と呼ばれ、「実際の年代」という意味を持つ。なお、表中の1 σ 暦年代範囲は68.2%信頼限界を示す範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界を表している。カッコ内の百分率は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味している。今回の暦年較正にはIntcal09というデータセットが使われた。較正曲線は国際的な標準パッケージとして普及しているが、研究の日進月歩に呼応して1998年、2004年、そして2009年と改訂が重ねられてきた。したがって、何年のバージョンで較正したかがわからないと、結果の暦年代を見ただけでは評価がおぼつかない事態を招く。

表1に示した下1桁を丸めていない炭素14年代値が元データであり、今後国際較正曲線が更新された際にはこの年代値を用いて再び暦年較正を行うことができる。また、年代の新旧を比較する場合には、炭素14年代か暦年較正年代のどちらかに統一して議論しないと、史実の順序が逆転してしまうことにもなりかねない。今回の測定では木材のある部分がまとめて採取されており、年輪を一枚ずつ調べたわけではない。当然、樹木の場合は内側の年輪が古く、外側の年輪が新しく測定されるはずだ。よって、技術的精度が十分に高いことを承知した上で、年代値の考察においてはだいたい20年単位で評価したほうが無難なデータ

だといえよう。

本報告をまとめるにあたり、門叶冬樹^{とかないふゆき}准教授、伊藤清郎教授、永井康雄教授には種々の資料を頂戴し多々御教授いただいた。ここに厚く感謝申し上げたい。本年2月からは本学における教育研究支援施設の一つとして理学部管轄の元に山形大学高感度加速器質量分析センターが立ち上がり、門叶先生が初代センター長に就かれた。東北・北海道地区の大学ではじめて導入されたAMSにより、年代測定や新薬開発など、分野横断的な研究が大きく花開くものと期待が高まっているところだ。

長谷川竹葉の山形錦絵と乗合馬車

中川 重

山形大学附属博物館所蔵の資料の中には、初代山形県令三島通庸が造成した県都山形の新市街地を描いた版画が数点収蔵・展示されている。その一つは、三島が洋画家高橋由一に依頼し明治18年に刊行された『三島県令道路改修記念画帖』一平成14年山形県指定有形文化財一に収められた「山形縣廳ノ図」などである。二つ目は由一が三島の業績を記録に留めていた同じ時期、東京在住の開化錦絵の作家長谷川竹葉が山形七日町八文字屋五十嵐太右衛門より依頼されて描いた『山形県下名所図絵』（通常済生館正面図と呼ばれる。明治13年作）など3枚の錦絵（山形錦絵と略称）である。いずれも三島が目指した近代的な県都造営を象徴する擬洋風建築物や幅広い道路など、新市街地の精緻な様相が手に取るように見て取れ、歴史的にも美術史的にも貴重な絵画文化財と言われている。

筆者がこれらの絵画を最初に見た時は、明治初期にこれほどの近代的な市街地が新たに造成され、そこに立つ洋風建造物（現在は擬洋風建築といわれる）が実に精緻に描かれていることに目が奪われるとともに、山形の都市変容への関心が深まった。しかし、その後何度か、とくに竹葉の『山形県下名所図絵』を見るにつけ、何か腑に落ちないことが描かれているのではとの思いが強くなっていった。その疑念がハッキリしたのは、日本が本格的な自動車時代に突入しつつあった学生時代に、日本には欧米で発達した馬車時代がほとんどなかったことや人力車や人車鉄道という世界にも類をみない交通手段が存在したという、日本交通史の特

異性について興味を抱いていたことを思い出した20年以上も前のことであった。

その意識で竹葉の『山形県下名所図絵』を熟視すると、この絵の主題である済生館の建物の精緻な描写は別として、絵の中央下部の賑わう済生館前通りに、何と二頭立て乗合馬車が闊歩している。目を転じると竹葉の『山形県新築之図』（明治14年作）には一頭立て馬車（乗合かどうかは小さくて不明）が2台、『山形県下眼鏡橋上真景』（明治14年作）には二頭立てと一頭立ての乗合馬車と思われる馬車が1台ずつ描かれている。果たしてこの時期の山形では馬車とくに乗合馬車が走っていたのだろうか。なお、ほぼ同じ時期に由一によって描かれた上述の『三島県令道路改修記念画帖』に収められた県内の55図の内、馬車が描かれているのは略称「栗子隧道西口の図」、「旧関山隧道東口の図」、「草薙村字座頭顔隧道の図」の3点に限られており、いずれもトンネル口の風景図と共通している。「山形縣廳ノ図」や竹葉の『山形県下眼鏡橋上真景』と同じ常磐橋を描いた「南村山郡吉原村新道ノ内酢川ニ架スル常磐橋の図」には馬車の姿は一台も見られない。



『山形県下名所図絵』（済生館） 24×35cm
明治13年（1880） 木版

この疑念を解くためには、この時期山形には馬車とくに乗合馬車が存在していたのかどうかを検証し、また錦絵作家として知られる竹葉の作品や画風の分析は勿論、当時の文明開化をモチーフとした錦絵にも言及する必要があると思われる。

まずは明治初期における山形県の馬車台数等を確認しておこう。山形県の最初の統計書といわれる『縣治一覽表』では明治8年版に鶴岡県に馬車2台が記載され、同11年版には山形県に6台と表記されているが、いずれも乗用馬車かは不明である。また『山形県統計書』明治13年版（12年調べ）には馬車二匹立1台、一匹立13台が表記

されている。さらに山形県史資料編二（三島文書）には県の〔備馬車控〕として箱馬車、スカシ馬車、笊馬車、四人乗馬車、式人乗馬車それぞれ1輛の記載（明治14年）がある。三島が登庁や県内出張などに馬車を常用していたことは佐藤国男著『三島通庸傳』（昭和8年刊）の中にも触れられており、既に乗用馬車が利用されていたことは確かである。しかし、竹葉図に描かれている乗合と思われる立派な二頭立て馬車の存在については確証が得られない。むしろ当時の山形では未だ乗合馬車は導入されていなかったと考えるのが妥当のように思われる。

一方、長谷川竹葉とはどんな作品を残し、その画風にはどんな特徴があったのであろうか。前述したように竹葉の山形錦絵3図の全てに乗合らしき馬車、それも2頭立て馬車が見事に描かれている。錦絵作家としての竹葉は『上州富岡製絲場之図』（明治9年）や文明開化の東京の風俗を描いた『東京名勝開化真景 日本橋』（明治10年）などの作品があるが、いずれの錦絵にも馬車が描かれており、その究極の作品が明治天皇御料馬車を描いた『憲法発布式鳳輦之図』（明治22年）であろう。ところが、竹葉が影響を受けたといわれる三代歌川広重をはじめ安達吟光、一曜斎国輝などの錦絵作家たちが当時の東京や横浜の開化の様子を描いた作品の多くにも、色々なタイプの馬車が描写されている。

わが国の馬車は幕末開港後の外国公館の自家用馬車の導入に始まり、明治2年に横浜～東京間に開業した乗合馬車は、宿駅制度が廃止された明治5年以降急速に東京近辺に普及するようになった。明治初期、馬車が文明開化の街の賑わいを象徴する絵柄として盛んに錦絵に取り上げられ、絵画自体にも新鮮な構図をもたらす表現として積極的に利用されていたと思われる。かのイザベラ・バードをも感心させた、地方には珍しい近代的な山形の街並みを見た竹葉は、そのイメージを当時の山形には存在しなかった乗合馬車を配することによって作為的に強調し、その結果済生館前通りも異常に幅広くまた賑やかに描かざるを得なかったと考えるのは下種の勘繰りといえるであろうか。

だからといって、竹葉が描いた3枚の山形錦絵の歴史的・美術史的な価値が損なわれる訳ではない。筆者の細やかな疑念を検証するためには、さらに山形における馬車普及の詳細を明らかにするとともに、竹葉の開化錦絵に対するモチーフや画風についてのより適格な分析などによって解消さ

れることは理解しているつもりであるが、何せ美術畑に全く疎い素人が後者を論ずることは至難の技である。開化錦絵や竹葉などに詳しい先学諸氏のご教示を請う次第である。

最後に、この小文を書くにあたり、竹葉・由一の絵図閲覧のみならず両者に関する文献等についてもご教示いただいた山形大学附属博物館の高橋加津美さん、鈴木 京さんと前館員の森谷菜穂子さんに記して感謝申し上げます。

資料紹介

細谷芝圃《観音像》



細谷芝圃《観音像》
絹本着色 一幅
全体 184.5×49 cm
本紙 102.2×36 cm

溪流沿いの岩上に、白衣をまとった観音が片膝を抱えて座っている。わずかに赤みのさすふっくらとした面持ちは柔和だが、切れ長の鋭い眼の奥には瞳孔が強調され、仏教における尊格としての厳しさも表しているようである。落款には「芝圃綏拝寫」とあり、白文印「芝圃」が続く。上巻絹（掛軸裏面、掛緒側）には「芝圃綏作観音像」と題・作者が記され、朱文方印「山形大学教育学部父兄会」が捺されている。作品を収める箱は後に伴われた物らしく、「芝圃筆 観世音像 壱幅」と名が誤って筆書きされている。

作者の細谷芝圃〔ほそやしほ：天保13年—大正15年(1842—1926)〕は、幼名恒太郎、字は元履、別号として無礙、木聖軒、三嶽一八山人などと称したといい、南画家と紹介される。現在はその名をほとんど聞くことはないが、画家辞典にも名の残る山形県出身の画家である。

芝圃の生まれた細谷与左衛門家は谷地郷北口町（現河北町）の豪農商であり、六代目与左衛門の時代には功あって新庄の戸沢藩より大庄屋を任命されるなど、河北町の旧家であった。芝圃は第十

代与左衛門の長男として出生、明治8年(1875)33歳で家督を相続し庄右衛門、福綏と改名する。絵画に親しむようになった契機は判然としないが、資料によれば絵画に目覚めた芝圃は師を求めて越後の横山墨農(1828—没年不詳)、富取芳斎(1808—1880)に、別の資料によれば越後の鈴木蘭溪(生没年不詳)に絵画を学んだとされる。明治3年(1870)に墨農から詩画が贈られていることから、家督相続の以前より既に墨農と交流があったようだ。また師と仰いだとされる芳斎は京都で中林竹洞(1776—1853)に山水画を学んだ画人である。江戸では春木南湖(1759—1839)、谷文晁(1763—1841)らと交流があり、中国絵画を研究したのちに南画家として越後に戻っている。芳斎を通して触れる南画家たちの作品・気風は当時の芝圃にとって多大な刺激を与えたに違いない。

明治24年(1891)には息子の益堂に早々に家督を譲り、画業に専念する日々を送ったとみられる。明治30年(1879)の京都第一回絵画共進会では『陸中獅子ヶ鼻巖の景』を出品、優勝を受けているようである。帝国絵画協会会員、日本南画協会（現・日本南画院）会員などに名を連ね、絵画展で受賞を重ねるなど画家として活躍するかたわら酒田、秋田、岩手などに滞在、秋田逗留の折には土崎港出身でのち寺崎広業門下となる鷺谷竹圃(1893—1921)という弟子ももうけた。また当時、郷里では大正5年(1916)に『谷地町志』が発行され、芸術の項に芝圃が大きく取り上げられている。帰郷の折りには芝圃を囲んでの「潤筆会」なるものも開催されていたらしく、郷里における芝圃の認知度がうかがわれよう。

また芝圃は漢詩もよくした。儒者東條一堂(1778—1857)に経史を学んだとされ、庄内の漢詩人で郷土史家の須田古龍(1886—1945)や、羽陽の三隠と称された漢詩人・漢学者の西川菊畦(1861—1938)とも交流があった。詩友の結束は固く、大正15年(1926)5月31日に芝圃が東京の亀戸に84歳で没すると、訃報は菊畦を通じてゆかりのある岩手にまで伝わり、佐藤猥巖(1862—1941)による追悼のコラムが地元紙に寄せられた。

以上のように資料をたどると、明治から大正にかけての活躍ぶりや興味深い交流の様相が見えるのだが、残念ながら現在確認できる絵画作品はあまりなく、本作が以上のような画歴上のどの時期に相当するものかは推定困難である。画面に目を向けると、十分に含まれた墨のよどみない線が、溪流を吹き抜ける風になびく白衣の裾を形作って

いる。墨線の上からは白色絵具が衣の襷の部分に丁寧に賦彩されている。観音の座す岩肌には顔料の上から金泥で岩皺を描き起こすなど、全体的に几帳面で丁寧な筆遣いであり懸命さが伝わってくる。画題である白衣観音は、岩の上に坐すという図様で中世以来よく描かれ、水墨画の好画題として親しまれてきた。生家である細谷家は、菩提寺のみならず最上三十三観音のうちの十八番札所岩木観音などにも保護の手を差し伸べ、また芝圃の叔父はのちの琳瑯和上（1830-1867）であるなど、代々神仏に対する信仰の念篤く縁深い一族であった。本作における図様の選択や丁寧な描写は、こうした背景をにじませているようにも思われる。

※文中点線部は資料の記述のまま記載した。明治30年に行われた絵画共進会としては、京都後素協会第一回全国絵画共進会があり、文中「共進会」とはこの展覧会を指す可能性がある。『岡倉天心全集』の審査報告によれば、出品総数は859点、受賞総数405点とされる。「優勝」の項目は無い。なお獅子ヶ鼻岩のある猯鼻溪は佐藤猯巖によって開拓、紹介され、大正14年に史蹟名勝天然記念物に指定されている。史蹟指定を受ける以前の明治29年、芝圃は猯巖の紹介もあってか猯鼻溪を訪れ題材としたようだ。

*

本稿を書くにあたり、山形美術館の月本寿彦氏より資料を頂戴いたしました。また山形大学人文学部教授岩田浩太郎先生、河北町市史編纂室の鈴木勲先生には細谷与左衛門家とその史料について、天童市美術館の池田良平氏には絵画共進会についてご教示賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・ 帝国絵画協会編集部『帝国絵画名鑑』 1916年
- ・ 谷地町役場『谷地町志』（下） 1916年
- ・ 泰山哲之『日本書画骨董大辞典 書画編』 歴史図書社 1971年
- ・ 山形県芸術文化会議『山形県芸術文化史』1973年
- ・ 岡倉天心『岡倉天心全集』別巻 平凡社 1981年
- ・ 中野玄三『仏画の鑑賞』大阪書籍 1885年
- ・ 鈴木勲「北口の細矢（谷）家」『河北の歴史と文化』 1-10頁 河北郷土史研究会 2008年
- ・ 村山鎮雄『山形の近代美術 増補改訂版』 印象社 2009年

（事務補佐員 鈴木 京）

平成22年度事業報告

平成22年度に本館で実施した博物館実習の単位修得者数は下記のとおり。

（単位：人）

学 部	人 数
人 文 学 部	3 3
地 域 教 育 文 化 学 部	1 1
理 学 部	2 4
学 外 者	1
計	6 9

公開講座は「植物の魅力を訪ねて」と題し開講された。この講座では3日間の講義のうち、一日は山形市野草園を会場にして、実際の植物に触れながら講義を聞くなど新しい試みも行われ、好評のうちに閉講式を迎える事ができた。

特別展は、平成22年10月23日から11月2日まで小白川図書館2階閲覧室を会場に「植物の魅力を訪ねて～山形の植物さく葉標本展」と、平成22年12月6日から17日まで小白川図書館1階シアタールームを会場に「疋田豊治ガラス乾板写真展」を開催した。

両展共、例年にも増して学外からの見学者が多く、地域に根ざした博物館としての機能を十分に発揮することができた。

なお、公開講座の講師・演題及び特別展の詳細、その他の博物館で実施した事業については、博物館のホームページで随時、写真入りでお知らせしていますので是非ご覧下さい。

平成21年度見学者総数

一般成人	個 人	6 5 6 人
	団 体	1 3 8
大 学 生	個 人	1,5 2 3
	団 体	2 8 0
児 童 ・ 生 徒	個 人	1 1 9
	団 体	4 0 3
合 計	個 人	2,2 9 8
	団 体	8 2 1
	総 数	3,1 1 9

※ オープンキャンパスでの入場者は含まない

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。

お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報 No.37 2011. 3 発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12
(TEL) 023 (628) 4930 (直通)
(FAX) 023 (628) 4930
URL <http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/>
E-MAIL hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp